久留米
通高
信専

第72号・
[MARCH 15,2013]

久留米工業高等専門学校企画主事室
〒830-8555　久留米市小森野1-1-1
TEL:0942-35-9300
http://www.kurume-nct.ac.jp/

久留米工業高等専門学校
校長　上田　孝

卒業生・修了生に贈る言葉
「わが道を究める」

本科卒業生・専攻科修了生の皆さん、御卒業・御修了おめでとうございます。これまでの皆さんの頑張りに大きな拍手を贈ります。保護者並びに御家族の皆様方にも、心よりお祝い申し上げます。

卒業生・修了生の皆さんは、この人生の大きな節目にあたり、一度立ち止まって振り返り、高専生活で何が得られたのかをじっくりと考えてみてください。それが皆さんの今後の長い人生を支えるバックボーンとなることでしょう。また、皆さんを陰に陽に支えてくださった保護者や御家族を始め、友人、先輩、先生など、周囲の方々への感謝の気持ちも忘れずに、きちんと言葉にして伝えることが大切です。

皆さんの卒業・修了の年に、本校機械工学科卒の歴史小説家である安部龍太郎氏が直木賞を受賞されました。安部氏は、在学中に小説家の道を志し、幾多の困難を乗り越えて、数々の名作を著しておられます。直木賞受賞式の翌日に来校され、マスコミから母校の後輩たちに伝えたいことは何かと聞かれた安部氏の答えは、「我が道をゆけ」でした。他者の言う事に耳をかさずに、自分勝手に進むことを意味しているのではありません。この言葉について、安部氏は、日本には古くから武士道や茶道など、「道」(みち)という考え方があり、自分が歩んでいる「道」を進み、究めることが大切であるとの説明をされていました。

福沢諭吉が創立した慶応義塾大学の塾歌の二番に、「往(ゆ)け涯(はてし)なきこの道を　究めていよゝ遠くとも」とあります。西洋の列強諸国と伍して、我が国が国際社会に漕ぎ出そうとする明治維新の人々の決意が窺えます。

今回直木賞に選ばれた安部氏の小説『等伯』は、我が国の桃山時代に活躍した絵師、長谷川等伯をモチーフにしたものです。安部氏は、この作品を書かれるにあたり、等伯の全てを理解するために、文献資料等の調査に加え、等伯の故郷である石川県七尾を実際に数度訪れたり、水墨画を学んだりされたそうです。構想開始から5年間の歳月を経て書き上げられたこの小説は、あたかも等伯が安部氏に乗り移ったかのような鬼気迫るものさえ感じられます。

本校在学中にラグビー部で鍛えた頑強そうな体格の安部氏は、普段は落ちついた柔らかな口調ですが、小説の話題になると、一変して大変エネルギッシュに熱っぽく語られます。このような自分が熱くなれる何かを持って、その「道」を究めていくことが、実り多い人生を過ごす上で必要です。

世界のクロサワと言われた黒澤明監督の映画『生きる』(昭和27(1952)年公開)では、無遅刻、無欠勤で毎日黙々と書類に印鑑を押すだけの事なかれ主義で無気力な生活を過ごしてきた市役所の課長(主人公)が、自分がガンで余命わずかであることを知って人生の意味を見失い、仕事を休んで放蕩しますが、虚しさだけが残ります。ある日、自分の夢を実現するために役所を辞めて玩具工場に転職しようとしていた元部下の女性と偶然出会い、その女性が工場で作った子供向けの玩具を見せられて、自分も何か作ってみたら？と言われた主人公は、それまで面倒でたらい回しにしていた、住民から陳情のあった町内の小さな公園を造ることを思いつきます。腰の重い上司や関係者を説得し、不当な脅迫にも屈せずにとうとう完成させ、雪の夜にその公園のブランコに乗っていて息をひきとるという粗筋です。人生の最後でしたが、熱くなれることに全力を注ぎ、目標を達成した主人公の人生は、充実感に満ちた幸福なものだったのではないでしょうか。

これから皆さんが漕ぎ出そうとする我が国の社会は、ようやく景気が下げ止まってきた程度で、なお厳しい経済状況にありますが、それぞれの進まれる道を究め、充実した人生を送られることを願ってやみません。

卒業生の言葉

卒業にあたって

機械工学科　5年
梶原　拓郎

高専での生活は長いようで短く、5年間という月日は私に多くの出会いと別れを与えてくれました。

初々しい高専生活のスタート、覚悟はしていたものの教室一面が真っ黒だったときの落胆は今でも覚えています。当時の私は、誰もが認めるような絵にかいたような優等生とは真逆の見てくれで、目も合わせてくれない同級生すらいました。そんな私が、初日で「俺がします！」と級長になったとき、48期機械工学科に衝撃を走らせたことでしょう。そんな私も気が付けば5年間級長を務めました。そのおかげか、級友ともすぐに打ち解けることができ、機械科で楽しく過ごせたと思っています。

しかし、学生生活も楽しいばかりの時間ではなく、学生生活ではつらい時期や悩める時期（＝病み期）もありました。特に就活は、不安でたまらなく何をするにも身が入らなかったことを覚えています。そんな“病み期”も友達や先生方がいてくれたからこそ乗り切れたのだと教科書通りの言葉を並べておこうと思います。

そんな私もとうとう卒業を迎えます。あれだけ歳の離れていた先輩たちの歳に追いつき、多くの素晴らしい後輩と出会い、そんな5年間での思い出は語りきれません。後輩たちには、語りつくせぬほどの思い出をまだまだ作っていただきたいと上から目線での言葉を残します。

最後に、担任として御教授いただいた、江島先生、米永先生、橋村先生、田中先生に心よりお礼申し上げます。加えて、御教授いただいた数多くの先生方、幅広くご支援いただいた機械工学科の先生方、久留米高専に携わるすべての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。こうして無事に卒業できるのも皆様のおかげだと思います。

5年間、本当にありがとうございました。

そうかもう卒業か・・・

電気電子工学科　5年
古川　真杉

高専生活５年間はあっという間に過ぎ去ったように感じます。だんだんと忙しくなる周りの状況が、この５年間を短く感じさせたのかもしれません。

１・２学年時には、自由にのんびりとした日々を過ごし、それと並行して存在する、簡単に留年できてしまう恐怖を体感しました。

他の高校生とは異なった進路からくる余裕と本当にこれでよかっただろうかと不安にかんじることもありました。

４・５学年になってからは毎週毎週、電子・電気機器実験のレポート提出課題に追われることとなりました。

４年生の時には、クラスで計画し、みんなでワイワイできた工場見学旅行にいきました。

さらに、５学年から始まった卒業研究では、自分のやりたいことを自由にやらせて頂きましたが、結果をなかなか出せずいろんな意味で辛い一年だったと感じています。

他にも、４年生の時には、バンド活動に参加したり、部活動で夜遅くまで残り作品制作活動に精を出したりもしました。

これらには、自ら思考しそれを反映する余地が存在し、そこには「自由」「自己責任」という言葉が明白にしめされていました。自分から勉強をすることは言わずもがな、自分から周りに溶け込むことや、周りを盛り上げていくことも示されていたのだと、この五年目にして気づかされました。他の高校に行っていたら体験できなかっただろう環境で５年間生活できたことはいい経験だったと思います。

だからこそ、もう少し自らの技術を伸ばすことや、もう少し周りと楽しく、助け合って、工場見学旅行や体育祭といった学内の行事を、より盛り上げていくことも良かったのではないかと頭をよぎります。

このような様々な感情、今までの自分とは別の方向へ働く思考が新しい大学生活における心の支えになるような気がします。

最後に、お世話になった先生方、優しくしてくれた友人たちよ、ありがとうございました。

卒業生の言葉

5年間を振り返って

制御情報工学科　5年
田崎　大剛

はじめに、私達に御教授してくださった先生方に大変感謝いたします。私達48期生の制御情報工学科は、今までの制御科の中でも特に厄介なクラスと言われたこともありました。そんなクラスの3・4・5年生と担任をしていただいた熊丸先生には専門分野、就職、進学ともに大変お世話になりました。加えて、学生課を始めとする事務の皆様方、寮務の皆様方、本当にありがとうございました。

私は正直、入学した当初は高専が好きではありませんでした。そもそも入学を決めた理由もただただ楽を求めて、校風が自由、大学への編入だけで入試がない、と言った雑な理由でした。しかも、制御情報工学科に入ることを決めたことも「なんとなく」という感じで、少しだけロボットに興味があっただけで制御科に決めました。そのため、2年生の頃までは、機械工学科が良かったと感じていました。その頃は、制御系の学習よりも機械系の学習のほうが楽しそうだったからです。制御科に入ったことを後悔したこともありました。

しかし、徐々に制御科でも機械系のことを学ぶようになり、制御科でよかったなと感じるようになりました。それは、少し興味のあったロボットの学習と、機械系の学習が始まりロボットと機械の関係がわかりはじめたからです。ちょうどその時期に、クラスでも毎日バカをやっているような友人とも仲良くなり、しかも寮生だったこともあり個性的な友人が増えて行きました。また、様々な行事を通して、多くの先輩や後輩とも出会いました。

友人たちとは、5年間という大変長い時間を過ごしてきましたが、高専祭のような楽しい時間ばかりではなく、テストや再試、就活、受験勉強などきつく苦しい時間もありました。時には、意見が食い違うこともありましたが、振り返ってみると、すべていい思い出だと思います。

これから自分は社会に出るわけですが、高専で経験しなかったような楽しく厳しいものだと思います。そのようなときは、今まで支えてくれた両親に、自分を取り巻いている皆さんに、恩返ししていくつもりで精一杯努力していきます。

最後に、久留米高専の卒業生であること、また制御情報工学科の卒業生であることを誇りに大きく羽ばたいていきます。
5年間ありがとうございました！！！

卒業にあたって

生物応用化学科　5年
梶原　聡恵

「五年間なんてあっという間だよ」と、一年生の時に言われた先輩の言葉を、今でもはっきり覚えています。その時の私は「それでもはやく五年生になりたいな」なんてことを考えていてその先のことは見ていませんでした。学校にも慣れたばかり、まだまだ先は長いと感じていました。

しかし、実際に五年生になってみると、先輩の言葉を本当に実感しました。どんなに後悔しないように、その時を楽しめるように頑張ろうと過ごしていても、振り返ってみると反省点だらけです。

クラスの仲間と遠出して騒いだこと、みんなで残ってテスト勉強に励んだこと、部活動で試合に行ったり遊んだりたくさんの人と交流を持てたこと。ここでは伝えきれないほどたくさんの思い出がこの五年間に詰まっています。それと同じくらい、もっと苦手をつくらず勉強しておけばよかった、もっとあの時遊んでおけばよかった、もっといろんなこの挑戦していればよかったと思うのです。

高専で過ごした時間は、確かに多くのことを学ばせてくれました。それは勉強だけのことではなく、人と接することであったり、仲間の大切さであったり、マナーやモラルであったりです。

ついに私も卒業を迎え、新しい生活が始まります。たくさん反省点はあるけれど、後悔はしていません。在校生の皆さんも、後悔のないよう、時間を大切に，充実した五年間を過ごして下さい。そして、今勉強していることを、将来使わない内容だなんて思わず一生懸命に頑張って下さい。絶対に使わない知識なんて無いし、頑張ったことは意外と自分の自信にもつながっています。

最後になりましたが、この五年間お世話になった先生方、クラスの皆、部活の仲間、たくさんの人に感謝しています。本当にありがとうございました。

卒業生の言葉

時間

材料工学科　5年
飯盛　仁

私にとって高専での５年間という時間はとても濃密な時間でした。この５年間でたくさんのことを経験でき、多くの先輩、後輩、友人達と出会うことができました。また高専入学と同時にダンスを始め、先輩と文化祭に出演したり後輩に指導したりコンテストに出場したりしました。ダンスのおかげで毎日が輝き、また他大学や社会人など様々な人と知り合うことができました。４年生の時に、まじめに練習に取り組む後輩たちを見て「きちんとした居場所を残してあげたい」と思いダンス愛好会を設立しました。これら高専での思い出は、私の宝物です。

ここで、５年間高専生活を送った卒業生として在学生の皆さんに伝えておきたいことがあります。高専は、他の学校と比べてかなり自分の時間が作れる場所です。その時間を可能な限り有意義に使ってください。有意義な時間とは、過去を振り返った時に「あの時はきつかったなぁ」と笑顔で言えるような時間だと、私は思います。それは自分が好きな勉強であったり、趣味であったり、部活であったり、委員会であったりと人によって様々です。また、”今”しかできないことを体験することもそれに当たります。私はダンスと応援団と級長と実行委員などを掛け持ちしていました。時には抱え込みすぎて押しつぶされそうになったことも多々ありましたが、その経験のおかげで自分自身が大きく成長することができたと実感しています。「もっと○○しておけばよかった・・・」という先輩や友人の言葉を聞くたびに私は胸が痛みます。二度と戻らない時間を嘆くことほど、悲しいことはありません。暇つぶしのゲームや目的のないネットサーフィンよりも、もっと自分の能力を開花させることがあるのではないでしょうか。目先の快楽よりも未来の栄光を見据えた方が、過去も未来も今も、より輝くはずです。

多くの可能性を秘めた皆さんが有意義な時間を過ごし、より明るい人生を過ごされることを心から願っています。

修了生の言葉

修了にあたり - 7 年の涵養-

機械・電気システム工学専攻　2年
井上　昂治

平成２５年３月をもちまして専攻科を修了する運びとなりました。久留米高専での７年間は、自分自身とじっくり向き合い、技術的知識だけでなく、人間性、道徳性、対話力などを磨くことができました。

本科（制御情報工学科）では、プログラミングコンテスト同好会（現プログラミングラボ部）に所属して、日々汗を（？）流していました。先輩方のご指導、同期、後輩との切磋琢磨もあり、全国規模の大会に何度も出場することができました。

本科５年と専攻科では、研究に打ち込み、夜遅くまで卒研室に籠っていたのが思い出されます。世の中に存在する問題に対して解決方法を考えるには、根気が必要ですが、これを成し遂げたときの喜びは一入です。研究成果を携え様々な場所で学会発表を行い、海外へも行くこともできました。台湾、ベトナム、タイ王国（写真はタイ王国での発表時）を訪れ、海外の研究者と議論することで、多くの刺激を受けました。この経験は現在の自身の原動力になっています。また、海外での学会発表を通じて英語力を向上させることもできました。これからは英語が必須だといわれていますが、専攻科においてこの重要性を実感できたのは大きいかと思います。今現在、ようやく研究者の卵になれたと実感しています。来年度は大学院へ進学します。これまでの経験を活かすとともに、社会に貢献する研究を目指して、日々努力する次第です。

最後に、この場を借りて、これまでご指導をいただいた諸先生方に感謝いたします。特に制御情報工学科黒木祥光准教授には研究における厚いご指導を通じて、研究者としての視野を大きく広げていただきました。今後の久留米高専関係者の益々の発展を祈り、筆を擱きます。

修了生の言葉

青春時代の失敗は老年の成功にも勝る

物質工学専攻　2年
田中　司

青春とは何もかも実験である。

私は高専の７年間、生物応用化学科の学生として様々な実験を行ってきた。実験というのは原因があり、それに対する結果が必ずついてくるものである。そこから何を学ぶことができるのか、考えるのかは、人それぞれの意見があるでしょう。

青春とはそれに似たものである。私の高専生活における１日１日は、まさに実験であった。例えば、部活動である。私は水泳部に入部後、選手だけでなくマネージャーとしても部活を活性化するために、ただひたすら取り組んだ。私が水泳部を選んだ理由は、カナヅチであったこと、また、私が入部したての水泳部が九州大会で最下位という成績であり、水泳部を盛り上げることを私自身の目標とし、やりがいを持って部活動へ取り組めると考えたためである。

部活動を活性化させるために私が取り組んだことは、部員が一丸となって取り組める目標設定、練習環境の確立、などである。入部当初、私は泳ぐことが苦手であったため、選手へのアドバイスを行うことができなかった。そこで、様々な参考書から学び、コーチなどにアドバイスをもらうなどをし、選手をサポートしようと試みた。全てのことが初めての経験であり、失敗することも多くあったが、1つ1つの失敗が次へと繋がるステップとなった。

多くの失敗をして多くの経験を重ねた結果、2年後、久留米高専水泳部は最下位からの躍進を遂げ、優勝という形で実を結んだ。実験には必ず失敗というものがついてくる。しかし、その失敗を受け止め、そこから何かを学ぶ姿勢が次へと繋がる道を見出す第一歩となるだろう。

今失敗を恐れ、一歩を踏み出すことを躊躇っている若輩者に伝えたい。年齢を重ねてからではできないことを学生時代に経験することは、必ずや自身の財産となり今後の人生で活かされていくので、まずは第一歩を踏み出して欲しい。青春という名の実験を無駄にしないで欲しい。

最後になりますが、7年間という長い間お世話になった生物応用化学科の先生方を始め、私に関わったすべての人にこの場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

退職教職員からの言葉

退職にあたって

機械工学科　教授
松井　悟

昭和６０年から２８年間久留米高専に在籍し、機械工学科で主に設計・製図関連の授業及びトライボロジーの研究を担当しましたが、本年３月をもって退職することになりました。今日まで何とか職務を全うできましたのも、教職員の皆様方から頂いたご指導とご支援、またすばらしい学生諸君に恵まれたお蔭であると深く感謝しています。この場をお借りして御礼申し上げます。

着任から１０年間は機械工学科２クラスの時代でした、４，５年生の授業は階段教室で８０人を相手に大声で話すことが必要で、説明に曖昧なところがあると学生から厳しい質問を受けることも多く、毎回緊張感を持って講義に臨んだことが思い出されます。また、クラブ活動では終始サッカー部を担当しました。とくに平成５年からの１０年間は、新たな外部コーチ制度の下、キャプテンを中心に学生諸君が知恵を出し合ってチーム力を向上させ、強力な支援体制のない弱小クラブながら５度の全国大会出場中４回ベスト４進出を果たすという成果を上げてくれた事に感心しました。

また、平成１７年からは学生主事という大役を仰せつかりました。当時は本校も様々な点で混乱を極めており、途方に暮れる思いをした事もありました。とくに学生指導の面では世情が飲酒や喫煙に厳しい規制を望む状況に変わってきており、何度も厳しい処分を下さざるを得なかった事がほろ苦く思い出されます。当時に比べれば現在の久留米高専は落ち着きを取り戻し、学業と課外活動に専念できる環境が整いつつあると思います。

今後も誇りを持って語れる素晴らしい高専として、ますます発展されることを期待しています。

退職教職員からの言葉

小森野とお別れの時が

制御情報工学科　教授
福田　幸一

今から５０年前（１９６３年）、国立久留米工業短大付属工高機械科へ入学し、翌年、改称された久留米高専に編入学しました。学生時代は、ドイツ語が必修、専門科目では教授の口述を必死にノートする講義も、クラブ活動のバドミントン部では顧問の代わりに練習試合を近隣の大学・高校へ直接依頼しに伺いました。小さい時から物作りが好きだったため、工作実習で工作機械の動きと精密さにひかれていき、小倉で開かれていた機械展示会に出かけ、様々なメーカーや機械があることを知り、丁寧に説明していただいた工作機械メーカーに志望し就職することができました。

７年間、製造・設計・輸出部門を経験し、縁あって母校機械工学科の教員に採用されました。平成５年に制御情報工学科へ移り、退職まで合わせて３７年間、主に図学・設計製図・ＣＡＤ／ＣＡＭの授業、歯車測定やＣＡＤ／ＣＡＭの研究に取り組んできました。高専における研究は、教育の向上のためにと感じています。弓道部を担当し学生諸君と一緒に練習し昇段試験を受けたこと、エコランやロボコンも、やったことだけ結果が出てくる楽しい思い出です。

歩んできた道を振り返りますと多くの方々に支えられてきました。心より感謝申し上げます。久留米高専でも助け合いの精神をより一層大切にしていただきたいと存じます。また、以下のシステムを作っていただければ幸いです。社会で役割を果たされている卒業生の姿を在校生に直接伝えていただく、学生の作品を保存展示する、入学から卒業まで学生ごとの諸記録を引き継ぐ。

在校生の皆さん、できるだけ早く志を立ててください。そのために、常に自分と社会を見詰め、何が必要なのか、何をもって人の役に立つのかを考えていくことが大切と考えます。

それでは、またお会いできる日を楽しみに！

退職に寄せて

制御情報工学科　教授
川口　武実

南東に連なる耳納の山々、北西に位置する脊振山系、悠久の流れ筑後川（千歳川）、美しい自然に囲まれた小森野に学生時代を含め４８年通いました。久留米工業短期大学付属工業高等学校生としての１年間と高専編入後の４年間、卒業後２年間の企業勤務のあとの教員生活４３年間、まさに「光陰矢の如し」です。在職中は、所属した学科の先生方を初め多くの先生方のご指導とお力添えをいただき、また事務の皆様にもいろいろな場面で大変お世話になりました。ありがとうございました。

在職４３年のうち、１９７０年から足掛け２０年は電気工学科（現電気電子工学科）に所属し、制御情報工学科創設前の準備期間として１年間、機械工学科に所属しました。１９９１年の学科創設とともに今の制御情報工学科に移籍し２２年が経過しました。学生の皆さんとは、授業、本科卒業研究、専攻科研究、クラス担任、クラブ活動（弓道部顧問）、進学・就職支援その他で大変長い時間を共有してきましたので、たくさんの思い出が残っています。紙面の制約でその一つ一つを辿ることはできませんが、少しだけクラス担任の経験についてお話ししたいと思います。

授業であれ、担任などの校務であれ、学生の成長を手助けするのが本来の仕事と私自身は考えて日々を過ごしてきました。制御情報工学科に移籍してからは、主事補・学科長などの校務が合わせて１２年も続きましたので、長い間担任業務から遠ざかっていました。現在の学科で初めて担任を受け持ったのが２００６年度で、２年続きの担任でした。このクラス（制御情報第１３期生）は、およそ８割もの学生がうち揃って卒業旅行に出かけるほど大変まとまりが良く、卒業後は「居酒屋同窓会」に招いてくれますので、実社会での活躍ぶりを聞くのが楽しみです。

学生の皆さん、人は誰でも内には「生きる力」が脈打っています。どうかそのことを常々強く感じ取り、自分を信じる心を持ち続けて下さい。若人の夢を秘めし千歳川。

４８年間のすべての出会いに感謝。ますますの本校の発展と、教職員の皆様のご健勝を心よりお祈りします。

退職教職員からの言葉

退職にあたって

生物応用化学科　教授
伊藤　義文

本来は、昨年３月に久留米高専の皆さんとお別れし奈良高専に移籍する予定でしたが、骨髄異形成症候群という病気が見つかり、１年間久留米の聖マリア病院で闘病生活を送る破目なりました。幸い骨髄ドナー提供者が見つかり、１０月に骨髄移植し現在は日常生活が送れる程度まで回復しております。

時々、テレビで骨髄バンクの宣伝を見ますが、まさか自分がこの制度を利用して生き残ることができるとは思いも及びませんでした。日本が誇れる誠に有難い制度で深く感謝しています。今まで、日本の医療制度について深く考えたことがありませんでしたが、今回の入院経験で日本は平等で、高額負担もなく高度医療が受けられる国であるなと実感した次第です。また久留米市は大学病院を含め医療先進都市である事も認識できました。在校生の皆様は勿論のこと、卒業して遠くに行かれている方も、大きな病気になった時には久留米の病院を選択肢の一つに考えたらと思います。

さて、私は化学工学や高分子材料の講義に加え、特許の講義を持たせてもらい、創造工学実験と組み合わせた知的財産教育に精力的に取り組んでまいりました。幸いパテントコンテストには隔年入賞者を出す程度まで実力を上げてきました。今後この分野は高専教育で重要になってくると思いますので、よろしく後任の先生方の奮起を願います。今後病気の完治までには１年程度かかるとされており、病院への通院も考えて、１年間は久留米に在住する予定です。できれば学校の就職業務や企業との共同研究のお手伝いをしたいと思っています。長い間本当にお世話になりました。

素晴らしき久留米高専

一般理科　教授
宮地　俊彦

久留米高専の一番の財産は何か。迷うことなく「学生」であると答えたい。何よりも感心させられたのは、才能に恵まれた（頭の中では数学的な能力の高さ、創造性に裏打ちされた思考力と理解している。）多数の学生が実に自由な雰囲気の中でのびのびと青春の命のときを過ごしていることであった。青春の命のときとは女流作家林芙美子の好んだ言葉である。彼女もいうようにそれは「いつ去るとも知らずに過ぎてしまう」ものである。それ故にこの命溢れる命のときを大切に充実したものにして欲しいと願うものである。

本校の校訓に「自立」とある。多くの学生は同年代の高校生と比較して、はるかに自立しているように思えた。教師の指導を頼りにすること無く自分で考え、自分の足で歩いているように私には思えた。始業開始と終了のベルが鳴らないことと校内放送が無いことはその象徴的なことであると私は理解した。他人に時間を管理されないということは自立の第一歩だと思う。

徒然草第百十七段はわろき友とよき友について述べられている。わろき友の二つめは「若き人」とある。これは兼好の人生から導かれた言説で私としてはよき友のに分類したい。よき友、最初は「物くるる友」。説得力ある指摘である。

2月8日(金)、教師生活最後の授業の日であった。珍しく雪が降り私の名残を惜しむ気持ちを伝えているように思った。

一時間目、一年生機械科の皆さんは試験前にもかかわらず、およそ試験と無関係な私の趣味の数学の授業につきあってくれただけではなく、熱心に授業に参加してくれました。

規則、法則を見つけることは大切なことですが、それを手懸かりにさらに大胆に思考を発展深化させることはもっと大切なことと考えます。

授業終了後様々な記念の品をいただきました。直ぐに兼好の「よき友」の一節を思い出しました。痛く感動しましたのは私の授業風景を撮りだめ、アルバムとして贈呈してくれましたことです。本当にありがとう。

退職教職員からの言葉

定年退職にあたって

電気電子工学科　教授
長田　芳裕

早いもので、私が本校へ奉職してから９年経ち、定年退職のはこびとなりました。

本校在職中、教育分野では半導体関連科目、気体電子工学、応用数学を基礎に重点をおいて講義しました。研究分野では半導体デバイスシミュレーションをテーマとして、電子輸送シミュレータを開発しました。電気学会九州支部協議員を二期務め、電気学会高専卒業研究発表会の本校開催に全力投球したことはまだ記憶に新しいところです。また、学校業務では着任二年目から今年度まで8年間切れ目なく４年、５年担任、学科長、就職主任を担当し、学生の将来に直結する就職および進学の進路指導に注力してきました。ときとして厳しいことを学生に言うこともありましたが、甲斐あって希望がかなえられたときのうれしさはひとしおでした。

これらの各分野に足跡を残せたのはともに仕事をした教職員皆様のご指導とご協力のお蔭である、と感謝しています。

教員生活では、講義や卒業研究に際して学生から出される思いもよらぬ質問や疑問は私には新鮮に感じられ、説明の仕方を工夫したり場合によっては一緒に考えたりすることは楽しみでもありました。

物事に対して好奇心をもつのは大切なことです。まず自分の頭で考えるのが第一歩ですが、それだけでは対象の理解におのずと限界があります。本校には様々な知見をもっている教員がおり、質問や疑問をぶつけて新しい知識を得て視野を広げられる教育環境にあります。在校生は、このような環境を積極的に活用してください。

この春本校を巣立つ人は、新生活に期待をいだく一方で一抹の不安を感じているかもしれません。しかし、学校で身に付けた技術や知識はこの先必ず役に立つので、自信をもって前に向かって進んでください。

私も本校を去り、４月から奈良高専で引続き教職に就く予定です。新天地では本校での教員経験を活かして職務に邁進し、新たな楽しみを見つけていこう、と思います。

最後になりますが、創立５０周年を迎えようとしている本校の益々の発展を祈念しています。

新たなチャレンジ

機械工学科　准教授
橋村　真治

この度、１７年間勤めさせて頂きました久留米高専を退職させて頂くことになりました。これまでお世話になりました先生方、技術職員の方々、事務職員の方々に心より御礼を申し上げます。また卒業生ならびに在校生諸君には、若い考え方とエネルギーを与えて頂きました。この場を借りて感謝申し上げます。

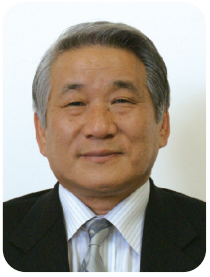
私は、久留米高専機械工学科を平成2年3月に卒業し、学生時代および教員時代を合わせて、これまでの人生の丁度半分を小森野の地で過ごしてきました。その間、久留米高専は私に様々なことを教えてくれました。学生時代には、「男としての生き方」を、また教員時代には「学生への夢の与え方」を、そのような母校からのお誘いを受けて着任したのが、私２６歳の時でした。当時所属していた三菱重工京都精機製作所の所長に、「会社では私のマンパワーは１ですが、学生を優秀な技術者として世の中に送り出すことができれば，私のマンパワーは１０倍にも２０倍にもなります。」と言って退職させて頂いたことを、昨日のように思い出します。あれから１７年，マンパワーを何倍にできたかはわかりませんが、常に学生には「大きな夢を描いてもらいたい」と思い、無我夢中で駆け抜けてきた１７年のような気がします。これまで多くの学生と出会い、こちらが教えることよりも、教わることの方が大きかった教員生活ですが、これから母校を離れても、日本という国のために、微力ながらマンパワーを大きくしていきたいと思います。

先日、ブリヂストンの創業者である石橋正二郎氏に関する書籍「正二郎はね！」を手に取りました。その中で、石橋正二郎氏が久留米に残された偉大な功績を初めて知りました。私には、そのような真似はできませんが、将来、故郷の久留米、母校の久留米高専に対して、何がしらのお役に立てるように、しばし久留米を離れて頑張りたいと思います。

２２年間、ありがとうございました。

退職教職員からの言葉

定年退職にあたって



事務部長
松﨑　誠一

本年３月末日を以って、定年を迎えることとなりました。久留米高専では３年間の在職期間ではございましたが、本当にたくさんの方々に支えられ、どうにかやってくることが出来ました。心から感謝いたしております。

前任の九州大学に昭和４６年に文部事務官として採用されて、九州大学、福岡教育大学、鹿屋体育大学、高知高専及び久留米高専での在職期間を含めて通算４２年間にわたって大学・高専の事務職員として携わることができました。これまでの事務職員としての経過を振り返って見ますと、平成１５年の法人化によって国立大学・高専の在り方、教職員のありようや環境は大きく変わりましたが、それでも職場の同僚、部下、上司などの皆様を含めて恵まれた環境であったことに今更ながら感謝しています。

１２年前の平成１３年７月、初めて大学以外の勤務先となった高知高専の教職員一人一人の皆さんの学生への教育と学生指導と学問研究に対して持つ真摯な姿勢が印象深く、感銘を受けたことから大学勤務の仕事に戻ってからも機会があればもう一度高専の仕事に付きたいと再三希望していたところ願いが叶って、久留米高専に赴任することが出来きました。２つの高専に赴任して、学科数、学生数、教職員数、予算規模及び学科構成等がほぼ同じで特徴のない金太郎アメのような学校が高専だと言う人もいるがそれは大きな誤解であって、それぞれの高専にそれぞれ異なる特色と文化があることを再確認できました。久留米高専の伝統も他の高専にない特色の一つであり、財産です。

久留米高専は、２年後の平成２６年度に創基７５周年・高専創設５０周年を迎えます。２年後からは次の５０年後に向けた取組について構築していく必要がありますが、教職員と学生の皆様でこれからも一つ一つ着実に実績と伝統を重ね上げられていくことができれば、必ずや久留米高専の輝かしい発展に繋がるものと信じております。

最後に、久留米高専の事務職員として勤務させていただいたことに対して、皆様に深甚なる感謝の意を表します。ありがとうございました。

久留米高専を去るにあたって

総務課 人事・労務係
堀江　久代

昭和42年7月に非常勤職員として会計課施設係に採用され、平成21年3月に定年退職後4年間の再雇用を併せ、約45年間<女の半生> を皆様に支えられて、大過なく勤めることができました。本当に「光陰矢の如し」でした。暖かいご指導とご厚情を賜り、唯々感謝でいっぱいです。厚く御礼申しあげます。

多くの方との出会いと触れ合いは「一期一会」の心で、また「我以外、皆我が師」との思いで、色々なことを学ばせて頂きました。特に9係を異動、延べ12係を経験したことは、貴重な財産です。思えば、当時は老朽化した木造の建物が次々に売払い解体され、鉄筋の建物に様変わりしていく中で、大講堂の曳家は驚嘆でした。昼休みは１棟残ったオンボロの木造建物で卓球に汗を流し、余りの大声に図書館からお叱りを受けたことや本校が主幹校として実施した全国高専体育大会では、担当係として携わり連日翌日になって退庁したこと等、懐かしく浮かんで参ります。また、一般学科事務室時代は、非常勤講師まで含めると何十人もの先生方と交わることができ、非常に有意義で充実した毎日でした。ある先生の「何でもいいからライフワークを持ちなさい」との一言に、それまで遊び半分だった書道をライフワークと決め継続しております。高専文化祭では連続20年間「職員書道展」を実施したこと、更に拙い書ですが「図書館使用心得」や専攻科修了証書の原版、体育大会の立看板等の筆耕ができ、日々報恩感謝です。今後も「継続は力なり」を信じて更なる精進を続け、「和顔愛語」を座右の銘として、第2の人生を元気に過ごして参ります。

また学外での書道展には校長先生はじめ多数の方にご高覧戴き、この場をお借りしてお礼申しあげます。

最後に皆様のご健康とご活躍、そして久留米高専の益々の発展を祈念し、お別れの言葉と致します。長い間お世話になり有難うございました。

専攻科インターンシップ

インターンシップで学んだこと

機械・電気システム工学専攻2年
松尾　貴之

私は10月末から約2ヵ月間、株式会社栄電舎様においてインターンシップの実施をさせて頂きました。栄電舎の事業内容は、主に自動制御盤の設計・製作、高低圧配電盤・分電盤の設計・製作や技術コンサルタントなどをされていて、私はその中の自動制御盤の設計について学ばせていただきました。インターン初日、回路図などの簡単な設計ぐらいしかやったことのない私は、上手くできるのか不安でいっぱいのまま会社に向かいました。

実際に研修がはじまってみると基礎の基礎から丁寧に教えて頂き、不安に思っていたのが馬鹿みたいに思う程仕事がやりやすい環境でした。設計のソフトの扱いに慣れてきたころ製造の方がつくり出荷するための図面の作成をおこないました。自分が設計した図面をもとにできあがった装置を見た時はとても感動しました。また、設計がつくった図面から部品の発注、製作へと進むため設計の仕事は他のどの部署よりもミスが許されない重大な仕事であると感じました。

そんなこんなであっという間に1ヵ月が過ぎると別の課へと移り、次はシーケンスのラダー図の作成について学ばせて頂きました。シーケンスについては数年前に授業で何度か習っただけなので言葉を聞いたことがある程度の知識でした。いざやってみると、練習用の課題をこなす度に使える命令、動作の種類が増えていきとても楽しく学ぶ事ができました。難しい課題になるとラダー図がとても長くなるのですが、次長から「誰が見てもわかるように作れて一流」とご指摘をいただきました。実際の装置は取引先の人が使うもの、設計者は誰が見てもすぐ理解できるようなプログラムの流れを常に考えながら作成をしないといけない、という設計の心構えを学びました。

インターンシップを通して、社会の経験を積むこと、仕事をする上での心構えを学ぶことができました。また、学校で深く学べなかったシーケンス制御を実践的に学べた事は「学校で学んだ知識の理解を深める」というインターンシップの目的を大いに果たしていると思いました。ただ、もし一年前にインターンシップを実施していれば、今ごろ就職先が変わっていたかもしれないほど良い会社であったので、就職先が決まっている時期にインターンシップの実施があることが非常に残念だと思いました。

インターンシップを終えて

物質工学専攻　2年
松尾　ともみ

私は、昨年の10月から1月末まで、佐賀県鳥栖市にある九州シンクロトロン光研究センターでインターンシップをさせていただきました。この研究施設は、シンクロトロン放射光の産業利用を目的としていて、技術相談から測定まで一貫して支援を行っており、地域の大学や佐賀県内企業の方が利用しやすいなど、地域に密着している研究施設です。

研修は、主に利用企画課およびビームラングループで行いました。利用企画課では、一般公開の公開実験の準備、見学者の案内、事務処理を行いました。公開実験ではポスターや実験用具の作製等を行いました。学校で実施する公開実験とは少し違う雰囲気で、見学者と一緒に楽しむことができ、いい体験ができました。ビームラングループでは、佐賀県保有のビームラインの見学を行い、ユーザー支援に必要な実験準備の重要性を知ることができました。また、研修の一環としてユーザーの立場を理解するために、専攻科研究で用いた試料について実験を行いました。実際に各ビームラインの実験装置を見学して、それぞれの特徴や調査項目等を、研究員の方から分かりやすく説明していただき、各ビームラインの知識を深めることができました。自分が考えていた以上に研究施設の実験を行う環境が整っており、実験装置がとても精密なことに驚きました。研修期間中に施設のシャットダウンがあり、普段見ることのできない真空ポンプの中身や配線の仕組み等を知ることができました。真空装置は実験室に身近にあるものですが、真空ポンプの構造や種類を今まで学ぶ機会が少なかったので、知識を広げるいい機会となりました。

今回のインターンシップで、働くとはどういうものかを身近に感じることができ、自分が就職するに先立ち、今やるべき課題が多いことに気付くいい機会となりました。

最後になりましたが、親切なご指導をいただいた九州シンクロトロン光研究センターの皆様には、心より感謝申し上げます。

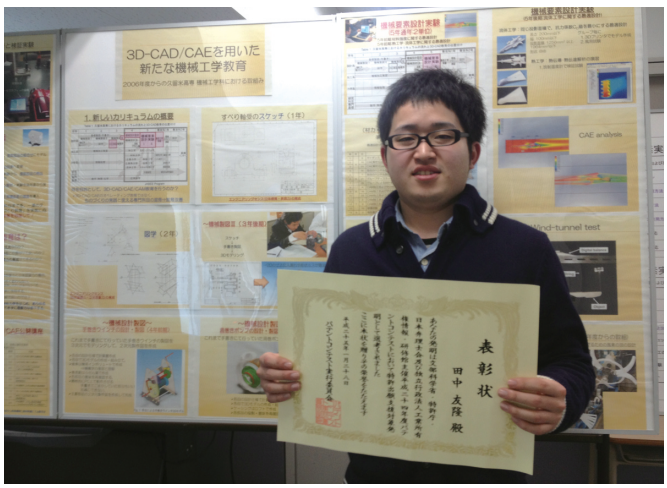
平成24年度パテントコンテスト 特許出願支援対象発明

機械・電気システム工学専攻1年　田中　友隆

文部科学省・特許庁・日本弁理士会及び工業所有権情報・研修館主催平成24年度パテントコンテストにおいて、特許出願支援対象発明として選考して頂きました。パテントコンテストとは、高校生、高等専門学校生及び大学生等の生徒・学生の知的財産マインドを育てるとともに、知的財産権制度の理解を促進することを目的に、文部科学省、特許庁、日本弁理士会及び工業所有権情報・研修館によって共催されている大会です。

本大会には、授業の一環として参加させて頂きました。創造工学実験において私が製作した「歩行器」を、新規性のある「発明」としてパテントコンテストに応募しました。特許出願支援対象発明に選考されましたので、これから弁理士の先生にご協力頂き実際に特許出願を行うことになっています。本大会に参加するにあたり、応募用の資料作成等大変だったことも多々ありましたが、とてもいい経験となりました。特許出願を行うため、「歩行器」の機構等について詳しく説明することは出来ませんが、決して難しい技術を用いているわけではありません。上記の通り高校生、高等専門学校生も対象としている大会ですので、皆さんも是非参加してみて下さい。授業や普段の生活の中にも発明のヒントは転がっています。

結びに、歩行器作成ならびにパテントコンテストに応募にあたり、熱心にご指導頂いた機械工学科の原田先生、橋村先生、田中先生、生物応用化学科の伊藤先生に心より御礼を申し上げ、謝辞と致します。

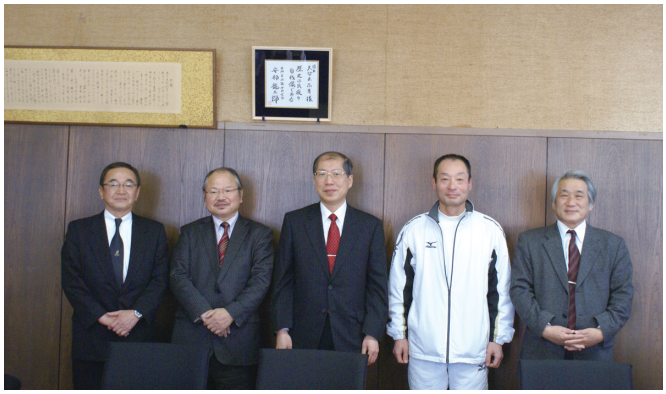


本校ＯＢ安部龍太郎氏（歴史小説家）が母校に直木賞受賞を報告

２月２３日（土）に、本校機械工学科卒の歴史小説家である安部龍太郎氏が、直木賞の受賞報告に本校を訪れました。前日に受賞式を終えた安部氏に、上田校長、ラグビー部顧問で本校ラグビー部OBの江﨑寮務主事、松﨑事務部長とラグビー部OB会副会長の佐々木敏文氏から、校長室で祝意が表されました。その後、安部氏は、ラグビー部OBからの寄附で体育館横に設置されている、安部氏作詞による部歌「筑後の杜」が刻まれたラグビー部創立５０周年記念碑を見学し、グラウンドで練習していたラグビー部員を激励しました。同部キャプテンの執行尊仁君（機械工学科４年）から、受賞のお祝いに部員らで寄せ書きをしたラグビーボールが贈呈され、部員たちが安部氏を囲んで部歌を合唱しました。

来校した報道陣から受賞報告に母校を訪問した感想について尋ねられた安部氏は、「直木賞を受賞したことを母校に報告する日が来るとは思っていなかった。感無量です。」と答えていました。

本校訪問後、安部氏は楢原久留米市長を表敬訪問し、続いて石橋美術館を訪れ、開催されていた「金閣・銀閣の寺宝展」で、等伯らの絵画を鑑賞しました。



平成25年度　学 年 暦

前　期

日	曜	4 月	日	曜	5 月	日	曜	6 月	日	曜	7 月	日	曜	8 月	日	曜	9 月
1	月	春季休業（～4/8）	1	水		1	土		1	月		1	木		1	日	開寮（10:00）
2	火		2	木		2	日		2	火		2	金		2	月	前期授業再開
3	水		3	金	憲法記念日	3	月	中間試験（～6/7）＊	3	水		3	土		3	火	
4	木		4	土	みどりの日	4	火		4	木		4	日		4	水	全校集会(専攻科生除く。13:00～)
5	金		5	日	子供の日	5	水		5	金		5	月		5	木	
6	土		6	月	振替休日	6	木		6	土		6	火		6	金	
7	日	開寮（10:00）	7	火	金曜授業	7	金		7	日	第2回体験入寮（7/7～7/14）	7	水		7	土	
8	月	入学式	8	水	午後クラスマッチ（本科午後授業なし）＊	8	土	専攻科入学試験(前期)	8	月		8	木		8	日	
9	火	始業式、オリエンテーション、クラス写真撮影、4、5年・専攻科健康診断	9	木	クラスマッチ（本科授業なし）＊	9	日		9	火		9	金		9	月	
10	水	前期授業開始 1～3年定期健康診断（午後）	10	金		10	月		10	水		10	土		10	火	
11	木		11	土		11	火		11	木		11	日		11	水	前期定期試験（～9/20、7日間）
12	金		12	日		12	水		12	金		12	月		12	木	
13	土	TOEIC検定試験	13	月		13	木		13	土		13	火		13	金	
14	日	第1回体験入寮（4/14～4/21）	14	火		14	金		14	日		14	水		14	土	
15	月		15	水	学生大会（予定）	15	土		15	月	海の日	15	木		15	日	
16	火		16	木		16	日		16	火		16	金		16	月	敬老の日
17	水		17	金		17	月		17	水		17	土		17	火	
18	木	開校記念日	18	土		18	火		18	木		18	日		18	水	専攻科研究論文発表会
19	金		19	日		19	水		19	金	本科、専攻科授業なし	19	月	久留米高専一日体験入学	19	木	
20	土		20	月		20	木		20	土	九州沖縄地区高専体育大会(夏季)	20	火		20	金	
21	日		21	火		21	金		21	日		21	水		21	土	学校説明会（佐賀）（予定）
22	月	公開授業	22	水	防災総合訓練（予定）	22	土	文化部発表会（予定）	22	月		22	木		22	日	
23	火		23	木		23	日		23	火	夏季休業（～8/31）、閉寮（14:00）	23	金		23	月	秋分の日
24	水		24	金		24	月		24	水		24	土		24	火	
25	木		25	土	後援会総会・保護者懇談会	25	火		25	木		25	日		25	水	
26	金	1年生合宿研修（4/26,27）	26	日		26	水		26	金		26	月		26	木	工場見学旅行（4年, 9/24～9/28） 補講・再試期間（9/24～9/27）
27	土		27	月		27	木		27	土		27	火		27	金	
28	日		28	火		28	金		28	日		28	水		28	土	福岡3高専合同学校説明会（福岡）
29	月	昭和の日	29	水		29	土		29	月		29	木		29	日	
30	火		30	木		30	日		30	火		30	金		30	月	平常授業
			31	金					31	水		31	土				

春季休業（4/1～4/8）
始業式日に新入生は数学診断テスト、英語外部評価テスト
10日午後：1～3年授業なし
車両通学講習会を実施する（日時未定）
新入生合宿研修を受講時数として取扱う

＊ 専攻科平常授業
クラスマッチの開催日時は学生会と協議

文化部発表会の開催日時は学生会と協議
＊ 専攻科平常授業

夏期休業（ 7/23～8/31）
九州沖縄地区高専体育大会（夏季）
19日　授業休業
西日本地区高専弓道大会（未定）
西日本地区高専空手道大会（未定）

8月　全国高専体育大会（夏季）

Kurume National College of Technology
本号掲載記事の無断転載を禁止します
No.72　MARCH　15, 2013